令和5年度
一般社団法人京都府訪問看護ステーション協議会
第30回定時総会報告

日時：令和5年5月27日（土）
　　11：00～12：00
場所：京都府立総合社会福祉会館
　　ハートピア京都3階大会議室
次第：会長あいさつ
　　議長選出
　　議案審議
　　第1号議案
　　第2号議案
　　閉会あいさつ

会長あいさつ
團野　一美

京都府訪問看護ステーション協議会は平成25年に一般社団法人化し、10周年を迎えることができました。これはひとえに日頃より当協議会の運営にご理解・ご協力をいただいている皆様のおかげと感謝しております。
令和5年度(第30回)の総会は新型コロナウイルス感染症の収束により4年ぶりに参集で行うことにいたしました。3年間という長きにわたるコロナウイルス感染症への対応は、5月8日の感染症法の改正施行を一区切りに新たな局面を迎えることとなります。コロナ渦においては、計画していた研修をやむなく中止や変更をし、また感染予防を徹底しながら運営委員や役員が何度も意見を交わしながら運営を行い、また、感染対策の研修やマニュアル作りにも力を入れてきました。皆様におかれましても、それぞれの場で懸命のご活動をされていたことと思います、心より敬意と感謝を申し上げます。
　さて、当協議会では令和3年度から事業の5本柱を設定し、運営を進めてまいりました。ネットワーク強化に関しましては、コロナ渦でそれぞれの地域が連携し合い危機を乗り越えてこられたのではないかと思います。京都府の訪問看護ステーション数は405事業所(3月31日現在)となり、京都府の目標である340か所を大きく上回っておりますが、当会の会員数は190事業所(4月1日現在)で入会率は46.9%と半数を切ってしまいました。地域力を向上させるためにも今後は当会の活動をさらに周知し、入会事業所を増やすことができればと思っています。
看取りサポートネットワークに関しましては、コロナ渦で入院中は面会ができず、在宅での看取りを選択されるケースが増えました。そのような時にも利用者のニーズに対応された訪問看護ステーションは多かったのではないでしょうか。小児訪問看護普及・ネットワーク構築に関しましては、研修などを実施し高評価を得ています。

令和4年度の実態調査では102事業所が小児の訪問看護を受け入れているあるいは体制があると回答されています。受け入れていない事業所で課題と思われることについては、「経験・スキルがない」という回答が最も多くなっています。今後も適切な研修や情報交換を行っていきたいと思います。在宅医療・介護連携推進事業への参画に関しましては、今後も各地域における推進事業活動に積極的に参画していければと思います。訪問看護人材確保及び管理後継者育成事業に関しましては、今年度も新人訪問看護師OJT研修を実施させて頂く予定です。

４月からは訪問看護総合支援センターが開設され、相談業務や研修が始まっております。行政・看護協会を連携を密にし、より有用な協議会を継続したいと考えております。今年度も役員一同、会員の皆様のご意見を頂きながら尽力したいと考えておりますので、ご支援・ご協力を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

議長選出

議　　長　段上寿穂　洛和会訪問看護ステーション右京山ノ内(C)
議長補佐　川上麻由美　訪問看護ステーションすばる(D)

議長

議長補佐

議案審議

第1号議案　令和4年度事業報告および決済承認の件

総会資料に基づき、三宅副会長から新型コロナウイルスの拡大防止のため、令和2，3年度においては書面開催から、4年度においても、感染対策が必要とのことで、初の試みとしてZOOM開催、成立。理事会・運営委員会・地区会議、また研修会でもZOOMを中心とした活動を報告。また山本副会長からは協議会代表として、訪問看護総合支援センター設立に向けて京都府・協会・協議会と協力し開設に携わった事、社会貢献のため京都市より新型コロナウイルス感染症患者の健康観察業務委託を受け実施した報告があった。
その後、各委員会報告、西田副会長より、地区支部活動、研修実施報告がなされた。続いて物部副会長から令和4年度の地区支部決済報告、研修補助金清算報告、会計決済報告がなされた。次いで吉井監事から監査の結果収支に相違ない旨の報告がなされ、審議の上、原案通り承認された。

第2号議案　令和5年度事業報告および予算承認の件

徳山副会長から令和5年度事業計画(案)、また鵜飼副会長から令和5年度研修計画(案)の説明がなされ審議の上、原案通り承認された。引き続き物部副会長から令和5年度研修補助金事業内訳、令和5年度会計予算(案)の説明がなされ審議の上原案通り承認された。また藤沢副会長より役員・地区支部運営委員(案)、令和5年度事業担当表(案)について説明がなされ審議の上、原案通り承認された。

京都府訪問看護ステーション協議会
KYOTO VISITING NURSE STATION CONFERENCE

★令和5年度 優良看護職員厚生労働大臣表彰

緩和ケア訪問看護ステーション架け橋
濱戸　真都里　管理者

★新任紹介

★退任紹介

★退任花束贈呈

★退任代表の挨拶

訪問看護ステーションふかくさ(F)
副会長 小松匡也

就任してからの２年間、コロナ禍によりリモートによる会議や研修がメインとなり、理事・運営委員は、パソコンに詳しい方や、私のようなそうでない人もみんなで手探りで作り上げていったように思います。人と人の距離が離れ、顔のみえる連携が少なくなりましたが、離れた場所でも繋がれることで会議や研修の参加率が良くなり、より多くの方とコミュニケーションがとれることや研修に参加できなかった方にもオンデマンドで一定期間共有して頂けることなどもメリットとなりました。また、研修物品の配布などで所属地区の色々なステーションへ訪問し、ステーションの場所を知ることができ、所長様方と横の繋がりが実感できたのも理事をさせていただいた大きなメリットの一つと思っています。

最後に、活動を支えて頂きました会長はじめ、理事や運営委員、事務局の方々、そして会員の皆様に感謝申し上げます。２年間ありがとうございました。

一般社団法人京都府訪問看護ステーション協議会
法人設立10周年記念

春の特別講演会　報告

訪問看護を語る
～看護の意味を問い続けた日々～

講師：北須磨訪問看護リハビリセンター
所長 藤田 愛氏

司会：小松 匡也 訪問看護ステーションふかくさ(F)

藤田先生は非がん終末期高齢者を在宅ケア、COVID19 の健康観察事業、訪問看護の人材育成、ハラスメント対策と本当に多岐にわたる活動を広く進めておられ、テレビでもその活動が紹介されており会場は初めから期待感に包まれ、藤田先生も久々の対面での講演会に「緊張してます」とのお言葉でしたがユーモアあふれる優しい語り口にどんどん引き込まれていきました。

第 1 章として訪問看護の礎となった出会いと別れとして事例をご紹介いただきそこからの気づきや学び、またそれぞれの利用者様に対する思いを教えてくださいました。
「私の人生、私の生命なのになぜ私の希望を尋ねてはもらえないのですか。」必死で1時間かけて「胃瘻はしたくない」と言う思いを伝えられた多系統萎縮症の高齢男性の思いを代弁した時の思い、叶えられず胃瘻が造設されてしまった際「心はこの時に死んでしまった」と感じ意思決定に添い続ける困難さや辛さを語られました。
「アンタらは何しに来たんや。」「90 やからってもう終わりや思ってるんやろ。」「看護師は自分の知りたいことだけを聞く、そして分かったつもりになって自分のしたいことだけをする。」と肺癌末期の 90 代男性に散々に言われながらも寄り添う姿勢を崩さずその方の思いを引き出され、「痛みも自分の中の生きた現象として感じたい」という看護師として見守るにはとても辛い選択を尊重し寄り添い続ける中、御本人の思い通りの旅立ちを支えた日々の葛藤。
「死にたい」と 1 年以上言い続けた 60 代前半のパーキンソンの女性が数年後「一日一日を悔いのないように生きたい。」と言われるまでに変わった、その方の心の中にある「家族の役に立ちたい」という思いを引き出す忍耐の関り。そして「やっぱりお母さんの作ったご飯はおいしいわ。」とご家族に言われ変わり始めたその女性の世界の広がりを支え続ける関り。
退院許可を出せない状況であっても「家に帰りたい」という 70 代肺癌末期の男性の思いを何としても叶えるために病院の主治医やスタッフの気持ちを動かす勇気の「1 週間だけ時間を下さい」どのエピソードもとことん寄り添う、とことんありのままのその人を大切にする腹の据わった哲学を感じるお話しでした。

意思決定を支える看護は単に施設か家かを選ぶことではなく、「どう生きたいか」を全体的に支える事でそれぞれの事情や人的・環境的要因の中で実現できることを見つける事であり、それは結果ではなく家庭の中で生じる苦悩や思案も含めてどんな看護が必要かを考察し支え続けることが大切であると教えて頂きました。

第 2 章として「まだ終わってないコロナ」として未曽有の大災害と言えるコロナとの戦いの中で訪問看護として何を経験し何を学んだのかをお話しくださいました。

第 4 波の中で医療介入が考えられないくらいに遅すぎて命を落としてしまった 35 歳の男性と「なぜ救ってもらえなかったのか」とやり場のない憤りを抱え続ける母親。訪問が必要な状態である人の把握がどんどん遅れる中、独りで亡くなっていた 80 代女性と「出来ることがあったんじゃないですか？」と当時自らもコロナに罹患し母を看られる状態でなかった息子。

誰もが混乱し誰もが憤る状況の中で学んだこととして「行政や職能団体の意思決定は時間がかかる」その為、平時より BCP として地域のネットワーク強化、ICT 化を進める事、情報共有の迅速化、危機時の職員のメンタルケアと団結力の重要性を学んだとして「COVID は個人や組織の課題を浮き彫りにした。訪問看護とは何かを職員と一緒に考えるチャンスとなった」と未来に向けても強い示唆をいただきました。

熱気に包まれた会場から質疑応答では看看連携でどんな思いも支える繋がりを強化したいという決意が聞かれたり、ハラスメント対策にも長じておられる先生に保安員についての質問、また、COVID の訪問の用意はしていたが実際に訪問するチャンスは無く先生の話された大変さは経験していない、という参加者に「準備しただけで素晴らしい。行こう、と思った事、志はずっと残っていく」と力強いエールを下さいました。

最後に賛助会員の宇都宮 宏子先生から「若いスタッフの中には思いを引き出す『問いかけ』ができない人が多いように思うがそのスタッフをどう導くのか」という質問があり、「はじめはセリフから手取り足取り、年単位で成長を見守る」というご回答をいただきました。

久しぶりの対面研修で 2 時間という時間があっという間に感じられるほど熱く濃密な講演でした。多くの学びを得るとともに訪問看護への情熱や希望も頂き、今後の活動に大いに活かしていきたいと思いました。

広報委員会
浦本 博美 洛和会訪問看護ステーション天王山(G)
瓦葺 美和 同和園訪問看護ステーション(F)
増谷 祐子 優心訪問看護ステーション(C)